

# 教育企画室による教学IRの展開 ～ミドルレベルの改善支援～

山田 剛史 教育・学生支援機構 教育企画室

## 教学IRレポート、教学IRポートフォリオ

従来は、各種アンケート結果の報告は単純集計にとどまっていたが、もう少し踏み込んで全学的な見地からの分析結果と各部局の結果とを記載した「教学IRレポート」として刊行します。そして、各種アンケートの結果を単体ではなく、きちんと蓄積し、経年で比較できるよう「教学IRポートフォリオ」の形で配布します。

主な配布対象は、大学執行部、教育コーディネーター、教学関係の部課長ですので、全ての方に配布するものではありませんが、将来的にはwebサイトでも閲覧出来るようにしたいと考えています。

## 教学IRに基づくコンサルティング

「教学IRレポート」は、全体的な傾向を掴むことに適していますが、具体的な改革・改善に結びつけるためには、他のデータや指標との関連性分析を始め、より踏み込んだ分析を行うことが効果的です。そこで、個々の部局のニーズに応じて追加分析を行ったり、個別相談に応じるなど、カリキュラム・コンサルティングも行う予定です。

## 教学IRに基づくFD支援

教学IRにおいて、レポートの重要性はもちろん、そ

の後の教育改革・改善に活かしていくことが非常に重要です。そのためには、結果を共有し、課題や問題点を発見し、改革・改善に活かすための場を持つことが効果的です。そのための場の設定やコーディネートなど、教学IRをFDに結びつけるための支援を行います。

例えば、2013年5月には、理学部において「大学院新入生調査に基づくワークショップ」を行い、参加された先生方から肯定的な評価を得ています(写真)。



理学部FDワークショップ  
2013.5.24

Institutional  
Research

News

2014  
創刊号



## IR(インスティテューショナル・リサーチ)への期待



柳澤 康信 愛媛大学長

国立大学の法人化から10年が経つ。この間、認証評価や法人評価、各種GP事業など、それ以前には存在しなかった制度や仕組みへの対応が求められるようになった。本学では、政策動向を踏まえつつもその一歩先をリードするべく改革を進めてきた。特に、教育改革を支えるFD/SDについては、学内・四国(SPOD)・全国(教育関係共同利用拠点)へと活動を展開してきた。学内では、教育コーディネーター制度や愛大GP制度を駆動力としつつ、100時間のサポートプログラム(ED・RD・MD)を実装した本学独自のテニユアトラック制度を創設し、今年度に運用を開始した。

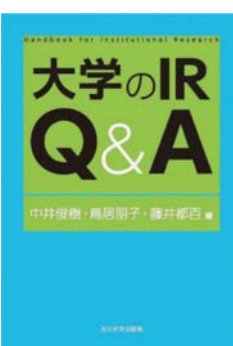
教職員の能力開発という面で一定以上の成果を上げてきたが、現在はそうしたFD/SDが、実際のカリキュラム改革や学生の学習成果に結実しているのかを挙証することが求

められている。そこにこそIRの出番がある。IRを効果的に実践することによって、成果を定量化したり、それを社会に向かって発信することが可能となるのである。18歳人口の大幅な減少期を控えて、待たなしの大学改革時代へ突入する。その意味でも、平成28年度に始まる第三期中期目標期間にIRをうまく活用できるか否かが、大学の将来を大きく左右すると言っても過言ではない。

もちろんIRは唯一の処方箋ではないが、更に加速する今後の大学改革時代を航海する上で有効な手段の一つとなる。これまで築いてきたFD/SDの更なる充実に、IRが加わることで、頑健な三位一体型の大学改革モデルを打ち出すこと——これが本学に課せられた使命だと言って良いだろう。

### 紹介コーナー

## ～書籍『大学のIR Q&A』～



### IRを進めるための実践知をQ&A形式で紹介

IRに関する書籍は多いとは言えません。日本では訳本が概説書がほとんどです。一方、IRに関する実践の需要は高く、みなが手探りの中で進めているのが現状です。そこで、IRの実践に携わっている執筆陣で、IRの実践知をQ&A形式で著したのが『大学のIR Q&A』(玉川大学出版部、2013年9月)です。他にも、IR実践のための指針や、調査票の作り方など、実践を行う上で役立つ情報がコンパクトにまとめられています。私(山田)も教育の内容・方法、学習の成果を中心に書かせてもらっています。興味のある方はお声がけください。

### 編集後記

■組織的に学生の学びと成長を促進させるために“データに基づく教育改善(教学IR)”は有効な手段と言えます。FD・SDと並ぶ第3の柱としてIRを定着させたいと思います。  
【山田】

■IR Newsでは、IRに関わる学内外の事項を取り上げていきたいと考えています。教育改善や計画立案等に有効に活用いただくためにも、記事に対するご要望等をお寄せください。  
【清水】

発行：愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室

〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番 TEL:089-927-8922

URL <http://www.ehime-u.ac.jp/>

# 高等教育改革を支えるIRの可能性

山田 剛史 教育・学生支援機構 教育企画室(教育調査・分析部門長)

## 大学教育を取り巻く環境の変化

1990年代初頭の少子化予測に基づく大学設置基準の大綱化に端を発し、2000年代のユニバーサル化による学習履歴の多様化、不安定な景気変動と、日本の大学を取り巻く環境は激変し、併せて高等教育システムも大きな転換期を迎えている。行政レベルでの質保証は大綱化によって崩れ、質保証の要となっていた入試選抜は一部の大学を除き事実上機能しなくなっている。一方、2004年には国立大学の法人化、法人評価・認証評価(第三者評価)制度が導入され、従来の事前規制から事後チェックへとシフトしてきている。また、教育の在り方も教授(者)中心から学習(者)中心へとシフトし、学習成果をめぐる国際的動向やFD義務化と相まって、教育内容・方法の改善もGP事業などに引っ張られながら大きく展開されている。

## IRとは何か?

こうした状況を鑑み、今後重要性を増してくるのがIR(インスティテューショナル・リサーチ)だ。IRは「機関の計画立案、政策形成、意思決定を支援するための情報を提供する目的で、高等教育機関の内部で行われる調査・研究」(Saupe,1990)を指し、その所掌範囲も財務・管理から学生・教育まで大学運営全般に渡っている。アメリカに端

を発し、諸外国にも急速に広がりを見せるIRは、日本の高等教育機関においても例外ではない。日本では、2008年の『学士課程教育の構築に向けて』(答申)で初めて政策文書で登場した。具体的には、「大学職員の職能開発」の項で取り上げられ、「大学の諸活動に関する調査データを収集・分析し、経営を支援する職員」の重要性が指摘されている。

## 組織的なFD・SDを促進させる第3の柱

機関(マクロ)レベルでの内部質保証システム(PDCAサイクル)の構築、カリキュラム(ミドル)レベルの組織的なFDはなかなか進んでいない。特定の教員への過度な依存(公平性の欠如)、特定の教員の経験則に基づく改革案の提示(客観性・一貫性の欠如)など、長年蓄積されてきた大学風土が大きな壁となっている。組織的なデータの収集・分析を通じて意思決定支援を行うIRは、こうした問題を克服する可能性を秘めている。大学が学生に与えているインパクト(効果や課題等)を把握し、持続的・効率的な大学運営システムを構築する。限られた資源で機関としての全体最適解を図る上で、IRを実装することは極めて有効であると同時に、FD・SDを個人的なレベルから組織的なレベルへと昇華させることも可能である。

# 愛媛大学におけるIRの展開

山田 剛史 教育・学生支援機構 教育企画室

## 経営情報分析室を中心とした評価対応型IR

まずは経営情報分析室によるIRである。本組織は、2003年4月に設置された大学評価情報等収集分析室を前身とし、大学執行部直属の組織として活動を行っている。大学情報データベースの設計・運用や中期目標・計画の作成支援、自己点検評価室への情報提供・支援などを主たる業務としている。評価対応型(アカウントビリティ志向)のIRと言える。

2012年11月には、「大学の戦略的な意思決定機能を

支援する組織として、教職協働の下、大学情報の総括的管理とIR機能の実質化を通じて、大学運営の強化を図る」ことを目的として改組され、新しいスタートを切った。

## 教育企画室を中心とした教育改善型IR

本組織は、1993年に設置された「大学教育研究実践センター」を前身とし、教育・学生支援機構長の指示の下、「本学の教育に関する諸課題について調査・研究を行うと共に、その成果を実際の教育活動に適用し、本学の教育改革を推進すること」を目的として、2006年に改組され

た。3つの部門を擁し、FD・SD・学生の能力開発を行ってきたが、近年では教育調査・分析部門を中心に教学IRの推進にあたっている。教育改善型(インブループメント志向)のIRと言える。新入生アンケートや卒業予定者アンケートなど、教学に関わる全学学生アンケートの企画・立

案・分析に携わっている。現在、経営情報分析室とも連携しながら、教学アセスメント・ポリシーの策定、各種アンケートのリニューアル、アンケートの結果を踏まえた教育改善ワークショップの実施など、基盤整備やFDとのリンケージについて取り組んでいる。

# 学生アンケートから見た愛媛大学生の学びの実態

山田 剛史・清水 栄子 教育・学生支援機構 教育企画室

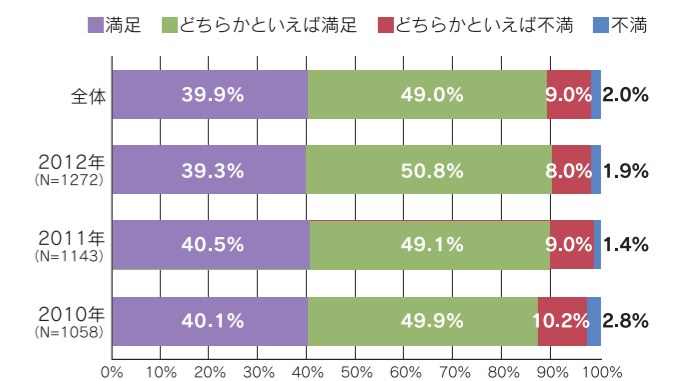
次に、実際に過去に収集した学生アンケートから愛媛大学生の学びの特性について見てみたい。今回は、卒業予定者アンケートで聞いている「愛媛大学生生活を通じて向上した能力」を取り上げる。本設問は、愛媛大学が教育方針として掲げている5つの能力について、入学時点と比べて「向上した」から「向上していない」までの4段階で回答するものだ。それにプレゼンテーション能力と外国語運用能力の2項目を加え、過去3年間(2010~2012年度卒業生)のデータを比較したものが下図の通りである。なお、各年度のアンケート回収率は56.8%、62.7%、66.7%となっている。

これを見ると、年度を追うごとに肯定的な回答率が増えてきている。特に、2010年度と2011年度、2012年度の間で向上度が高くなっている。外国語運用能力については、絶対値は低いものの年々向上度は高くなっていることが分かる。絶対値で見ると、「基本的なコミュニケーション力(多様な人と協働するためのコミュニケーション力)」、「基本姿勢

(自らの個性や適性に基づき学び続ける姿勢)」、「基本的思考力(問題の発見・解決に取り組むための思考力)」の順に高く、「基礎知識(多角的な視点を培うのに必要な幅広い基礎知識)」や「プレゼンテーション能力」は3.00を切っており、相対的に低い値となっている。

また、学生生活満足度は過去3年間横ばい状態が続いている(下図)。

## ▶愛媛大学生生活に対する満足度



## ▶愛媛大学生生活を通じて向上した能力(4段階)

